漢法苞徳塾資料	No. 211
区分	診察論・脈診
タイトル	難経脈論における部位論的記述
著者	八木素萌
作成日	1989.12

★脈の部位の意味を記述している難は、二難の寸（陽）・尺（陰）の記述〈78字〉、五難の菽法による五臓配当の記述〈83字〉、十八難前段の3部への経脈配当の記述〈118字〉、中段の上中下への疾病の所在を診るとの配当の記述〈73字〉、十九難の左右の意味（病の内外・大過不及・病の左右の所在）の記述〈141字〉、などの難で、文字数の合計は、493文字の記述量である。脈を論じている難の総文字数が6000字弱（数え方＝解釈がからむので＝によっては5000字強）であるから、493文字と言うのは、6000字弱の一割にも満たない記述量となる。

★経絡治療が言う六部定位脈法の根拠となっているのは十八難の前段の記述である。中段の記述もやや関係しているので、これを加えて数えても191文字の字数である。従って脈論の全文字数の493字に対しては3～4%の記述量である。

★十八難の前段の記述は経脈の部位配当を主とするものである。『脈有三部 部有四経～』の「経」字の使用と、難経全体に記述の特徴、つまり三陰三陽の名義を用いて記述するのは、季節における陰陽の消息を述べる場合と、経脈を述べる場合だけである事である。この二つの理由から、三部への三陰三陽の配分は、主として経脈配当の論であると言うことができるのである。

★五難の菽法の記述は、次の点で注意を要するものである。三菽の部位は『肺』の脈位である。しかし、ここには「与皮毛相得者 肺部也」という記述がある。そして、皮毛は肺の主る所である。六菽は『心』の脈位である。しかし、この記述には「与血脉相得者 心部也」と言う論が続いている、血脈は心の主る所である。九菽は『脾』の脈位である。その記述に続いて「与肌肉相得者 脾部也」と言うのである。肌肉は脾の主るものである。十二菽は『肝』の脈位である。「与筋平者 肝部也」とある、つまり「十二菽の重さで脈を按じて筋の深さの所で感知できる脈は、肝の部の脈を診ているのである」と論じている訳である。筋は肝が主っているものである。『腎』については「按之至骨举指来疾者腎部也」〈これを按じて骨に至りて指を挙げて来たるもの疾のものは腎の部なり〉と述べている、この記述を正しく理解するうえで重要な所は、「疾」と述べている脈状表現の解釈の問題である。これは「パット実の脈状が戻ってくるのは腎の部分の脈の姿」と述べているのである。

「疾」と「実」は音通の仮借かしきであるとする多くの注釈者の説に従うと、このような解釈が適切であるということになる。他の四臓に記述から見ても腎の主っている骨を勘案した記述であることは明らかである。

此処には脈診は単に脈拍のみを診ているのではなく「皮毛」「血脈」「肌肉」「筋」「骨」などの五体論的な把握部位の状態と俱に感知しようとするものであると言う思想が示されている事は究めて明らかである。

★二難は、尺と寸とで陰と陽とが配されるとの記述である。これは一般論的・抽象論的に部位を配当したのではなくて、陰陽の診察との関係を指示しているものである。この事は、三難・六難・十四難の終段・十九難・三十七難中段などの記述と関連しているものである。これらの記述のように、脈に従って病の陰陽を診察すると言うことの重要な意義を付与されている論述である、という事が見て取れる。

★浮脈・中脈・沈脈なども菽法と同様に脈位の論とも言えるから、四難〈288字〉と六難〈50字〉の記述も脈位論として扱えられなくもない。

「浮脈の部位」は「肺と心」・「中脈の部位」は「脾」・「沈脈の部位」は「肝と腎」などのように配されている。菽法だけでは不十分と見なしているから、「浮而大散者 心也」〈浮ニシテ大カツ散ナルモノハ心ナリ〉「浮而短濇者 肺也」〈浮ニシテ短カツ濇ナルモノハ肺ナリ〉と、「(沈) 牢而長者肝也」〈(沈メテ) 牢クシテ長ナルモノハ肝ナリ〉「按之濡挙指来実者腎也」〈コレヲ按シテ 濡ク指ヲ挙ゲテ来タルコト実ナルモノハ腎ナリ〉などの様に記述している。それぞれの臓の脈状について特徴的に記述している。また、「浮之損小 沈之実大 故曰陰盛陽虚 沈之損小 浮之実大 故曰陽盛陰虚〜」(六難)〈コレヲ浮ニシテ損ナワレテ小サク、コレヲ沈メレバ実カツ大ナリ 故ニ陰盛ニ陽虚スモノト曰ウ コレヲ沈メレバ損ナワレテ小サク コレヲ浮カベレバ実カツ大ナリ 故ニ陽盛陰虚ト曰ウ〉の様に、状と浮・中・沈の部位との関連を記述して五難の「菽法」記述を補足している。

★以上より部位の意味と脈状の意味とを兼ね合せて脈を診るべきことが判る。